

## インターネット利用と性意識・行動の関係性に関する研究

共同研究担当 檣淵 めぐみ (筑波大学)  
安藤 玲子 (金城学院大学)

### 1. 研究の概要

近年、青少年が、携帯電話やパソコンを通じ手軽にインターネットを利用できるようになってきた。それに伴い、インターネットを利用することにより、誤った性知識や偏った性意識を持つようになる、性行動の若年化を促進するといった悪影響が懸念されている。しかし、これらの影響について実証的に検討した研究はほとんど行われていない。

以上を踏まえ、本研究では、携帯電話およびパソコンによるインターネット利用（以下、ネット利用と表記）が青少年の性意識・行動に及ぼす影響を検討するために、高等学校での 3 時点のパネル調査（同一の対象者に同一の質問紙を複数時点で実施する方法）を実施した。調査実施時期は、1 回目調査が 2009 年 12 月、2 回目調査が 2010 年 6 月～7 月、3 回目調査が 2010 年 12 月～2011 年 1 月であった。3 回目調査までの協力校数は 4 校、3 回の調査に回答した分析対象者数は 734 名（男子 282 名・女子 452 名）であった。本報告書では、以下の目的 1 から目的 7 についての分析結果について報告する。

### 2. 研究の目的

#### ■目的 1：高校生の性行動の現状と、同年代の性の現状に対する認識を明らかにする

2 人きりの「デート」、「キス」、「ペッティング」、「コンドームを使ったセックス」と「コンドームを使わないセックス」（和集合を「セックス経験」の指標とした）の経験を尋ねた。また、青少年が同年代の性経験率を過大視しており、「仲間から遅れたくない」という意識が自身の性経験を促進するという可能性がある。そこで、「同年代男女のセックス経験の推定値」（性の現状認識）を尋ね、実際のセックス経験率と比較することで、同年代の経験率を過大視しているのかを検討した。

#### ■目的 2：ネット利用が性意識・行動に及ぼす影響を検討する

ネット利用が、性の現状認識、性意識、および性行動の経験に及ぼす影響を検討した。性意識としては、「性的寛容さ」、「通過儀礼としての性」、「責任意識」、「性犯罪神話」、「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」、「性的マイノリティに対する偏見」の 6 種類を測定した<sup>1</sup>。ネット利用については、「コミュニティ・サイト」、「動画サイト」、「自作小説・自作

<sup>1</sup> 「性的寛容さ」は寛容な性規範意識、「通過儀礼としての性」は早期の性経験への憧れ、「責任意識」はセックスに関わる責任感、「性犯罪神話」は性犯罪を合理化し容認する誤った信念、「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」は恋愛至上主義的傾向を測定するもので

マンガ」のサイト、芸能人などの「公式サイトやブログ」、の4ジャンル別に利用量を測定し、これらの合計をネット利用量の指標とした。

■目的3：友人・先輩との性的情報交換が性意識・行動に及ぼす影響を検討する

先述の通り、青少年の性意識・行動への影響源としてネット利用の悪影響が懸念されているが、青少年の性情報源として最も多いのは「友人・先輩」であり(門本・大木・ト部, 1998)、これらの日常的な性的情報交換が性意識の形成に大きな役割を果たすことが指摘されている(湯川・泊, 1999)。そこで、友人や先輩(同性と異性)との性的内容を含む会話量を尋ね、2項目の合計得点を性的情報交換量の指標とした。これが性意識・行動に及ぼす影響を検討し、ネット利用の影響と比較した。

＜以下の目的は、目的2において有意な影響関係が見られた場合を条件とする＞

■目的4：性意識・行動に影響を及ぼすネット利用の特徴を検討する

目的2において有意な影響関係が見られた場合に、パソコンと携帯電話でのネット利用のどちらがより強い影響を持つのか、そしてどのようなジャンルでのネット利用が、より強い影響を持つのかを検討した。

■目的5：ネット利用の影響の強さが、学校での教育的取り組みにより異なるかを検討する

目的2において有意な影響関係が見られた場合に、学校での「性教育」および「メディアの安全な利用に関する教育」の実践によって、ネット利用の影響が強まる／弱まるのかを検討した。

■目的6：ネット利用の影響の強さが、家庭の特徴や取り組みにより異なるかを検討する

目的2において有意な影響関係が見られた場合に、フィルタリング・ソフトの設定の有無と、保護者との会話量の高低によって、ネット利用の影響が強まる／弱まるのかを検討した。保護者との会話量は、学校での勉強や人間関係、進路、メディア利用や金銭のことなどについて、保護者とどの程度話しているかを尋ねる7項目の合計得点を指標とした。

■目的7：ネット利用の影響の強さが、科学的な性知識と性的メディア・リテラシの個人差により異なるかを検討する

目的2において有意な影響関係が見られた場合に、個人差変数(科学的な性知識、性的なメディア・リテラシ)の高低によって、ネット利用の影響が強まる／弱まるのかを検討した。科学的な性知識の指標は、性行動に関わる科学的知識の理解度を測定する16項目の合計得点とした。性的メディア・リテラシの指標は、ネット上や出会い系のリスク認知や、ネット上の性に関する言説に対する批判的思考力などを測定する10項目の合計得点とした。

---

ある。

### 3. 研究の主な結果

#### 目的1（高校生の性行動の現状と、同年代の性の現状に対する認識を明らかにする）の結果

■高校生の実際のセックス経験率は男子 22%、女子 16%であったが、同年代の 30%以上が既にセックスを経験していると推定しており、性的に活発な方向に現状認識していた。

分析の結果、3 回目調査時点において、男女とも 45%以上がデートをしたことがあり、40%以上がキスを、30%程度がペッティングを経験していることが示された。セックスについては、男女の差が大きく、男子で 22%、女子で 16%の生徒が経験していた。一方、性の現状認識については、同じく 3 回目調査時点において、男女とも同年代のセックス経験率を 30%以上と推定しており、青少年が同年代の性経験率を過大視していることが示唆された。結果の詳細を表 1 に示す。

表 1 同年代の性行動の現状認識の平均値と実際の経験率

		男子			女子		
		1回目	2回目	3回目	1回目	2回目	3回目
現状認識	セックス経験率(男)	33.4	32.1	33.3	40.4	39.0	38.6
	(女)	37.5	34.6	35.9	37.4	36.7	37.2
性行動	デート	35.5	40.1	45.0	35.6	43.1	48.5
	キス	28.4	30.9	40.8	30.5	35.2	41.6
	ペッティング	19.9	23.8	31.6	18.4	23.0	27.7
	セックス	10.6	15.2	22.3	9.5	12.6	16.2
	・コンドームあり	9.9	14.5	20.6	8.2	11.9	14.8
	・コンドームなし	5.3	7.1	14.2	5.3	6.0	9.1

注：表中の数値は%。

#### 目的2（ネット利用が性意識・行動に及ぼす影響を検討する）の結果

本分析では、ネット利用が性意識・行動に及ぼす影響について、1 回目調査のネット利用が 2 回目の性意識・行動に及ぼす影響（1→2 回目の半年後の影響）と、2 回目のネット利用が 3 回目の性意識・行動に及ぼす影響（2→3 回目の半年後の影響）、および 1 回目のネット利用が 3 回目の性意識・行動に及ぼす影響（1 年後の影響）を検討した<sup>2</sup>。

<sup>2</sup> 本分析以降、因果関係の分析では、学校の影響を除くため分析に使用する得点を中心化(学校ごとの平均を 0 に変換)した。また、性差が想定されるため、男女別に分析した。

■男子では、ネット利用は、「同年代の性の現状」をより活発な方向へ認識させ、「性的マイノリティに対する偏見」を増強させる効果を持っていた。性行動の経験への影響は検出されなかった。

男子を対象とした分析の結果、1回目のネット利用量が多いほど、1年後の「同年代のセックス経験率の推定値」が高まっていた。また、1回目のネット利用量が多いほど、2回目の「性的マイノリティに対する偏見」が強まっていたが、1年後には影響が検出されなかった。性行動への影響は検出されなかった。

■女子では、ネット利用は、「同年代の性の現状」をより活発な方向へ認識させ、「性的マイノリティに対する偏見」を増強させるとともに、性行動の経験に対して促進的な効果を持っていた。

女子を対象とした分析の結果、1回目のネット利用量が多いほど、半年後の「同年代のセックス経験率の推定値」が高まっていた。また、2回目のネット利用量が多いほど、3回目の「性的マイノリティに対する偏見」が強まっていたが、1→3回目の1年後の影響は検出されなかった。性行動については、1回目のネット利用量が多いほど、1年後の「ペッティング」と「コンドームなしのセックス」経験が増加していた。半年後の「デート」経験も増加していたが、1年後の影響は検出されなかった。「コンドームなしのセックス」経験への影響は、2→3回目の半年後の影響も見られた。

表2 ネット利用が性意識・行動に及ぼす影響

		男子			女子		
		1→2回	2→3回	1→3回	1→2回	2→3回	1→3回
現状認識	セックス経験率(男)	—	—	.16**	.11*	—	—
	(女)	—	—	.12*	.12**	—	—
性意識	性的マイノリティに対する偏見	.10*	—	—	—	.09**	—
性行動	デート	—	—	—	1.09*	—	—
	ペッティング	—	—	—	—	—	1.10*
	・コンドームなし	—	—	—	—	1.16*	1.16**

注：有意な影響関係が見られた数値のみ示した。現状認識と性意識の数値は $\beta$ 、性行動の数値はOR（オッズ比）<sup>3</sup>。\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ 。

<sup>3</sup>  $\beta$ （標準化偏回帰係数）は-1から1の範囲の値をとり、符号が+の場合に正の効果（強める効果）が、-の場合に負の効果（弱める効果）があることを意味する。オッズ比は0以上の値をとり、1よりも大きい場合に正の効果が、1よりも小さい場合に負の効果があることを意味する。

### 目的 3（友人・先輩との性的情報交換が性意識・行動に及ぼす影響を検討する）の結果

友人や先輩との性的情報交換が性意識・行動に及ぼす影響について、目的 2 と同様の分析を行った。結果の詳細を表 3 に示す。

■友人・先輩との性的情報交換は、同年代の「性の現状認識」をより活発な方向へ認識させる一貫した効果を持っていた。

分析の結果、男女ともにおいて、1 回目の友人・先輩との性的情報交換量が多いほど、半年後と 1 年後の「同年代のセックス経験率の推定値」が高まり、2 回目の性的情報交換量が多いほど、半年後の「同年代のセックス経験率の推定値」が高まっていた。

■男子では、友人・先輩との性的情報交換は、性行動の経験を促進する効果を持つ場合があった。

男子の結果では、1 回目の友人・先輩との性的情報交換量が多いほど、1 年後の「セックス」と「コンドームなしのセックス」経験が増加していたが、1→2 回目と 2→3 回目の半年後の効果は検出されなかった。また、2 回目の性的情報交換量が多いほど、半年後の「キス」と「ペッティング」経験が増えていたが、1→2 回目の半年後と 1 年後の効果は見られなかった。

■女子では、友人・先輩との性的情報交換は、性行動の経験を促進する一貫した効果を持っていた。

女子の結果では、1 回目の友人・先輩との性的情報交換量が多いほど、1 年後の全ての性行動の経験が増加していた。「デート」、「キス」、「コンドームなしのセックス」経験では、1→2 回目もしくは 2→3 回目の半年後の効果が一部で有意に至らない場合もあったが、総じて一貫性の高い効果であった。

■男子では、友人・先輩との性的情報交換は、性意識の「性的寛容さ」「性犯罪神話」「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」を増強する効果を持っていた。

男子の結果では、1 回目の友人・先輩との性的情報交換量が多いほど、1 年後の「性的寛容さ」「性犯罪神話」「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」が強まっていた。「性的寛容さ」については、2→3 回目の半年後の効果も見られた。「性犯罪神話」「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」では、半年後の効果はいずれも有意に至らなかった。

■女子では、友人・先輩との性的情報交換は、性意識の「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」を増強する効果を持つ場合があった。

女子の結果では、2 回目の友人・先輩との性的情報交換量が多いほど、半年後の「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」が強まっていたが、1→2 回目の半年後と 1 年後の効果は検出されなかった。

表3 友人や先輩との性的情報交換が性意識・行動に及ぼす影響

		男子			女子		
		1→2回	2→3回	1→3回	1→2回	2→3回	1→3回
現状認識	セックス経験率(男)	.13*	.20***	.21***	.19***	.11*	.10*
	(女)	—	.25***	.21***	.22***	.12**	.12*
性意識	性的寛容さ	—	.11*	.22***	—	—	—
	性犯罪神話	—	—	.11*	—	—	—
	ロマンティック・ラブ・イデオロギー	—	—	.16**	—	.16***	—
性行動	デート	—	—	—	1.31**	—	1.20*
	キス	—	1.17*	—	1.31**	—	1.27**
	ペッティング	—	1.30***	—	1.35**	1.24*	1.19*
	セックス	—	—	1.12*	1.22*	1.41***	1.26**
	・コンドームあり	—	—	—	1.20*	1.29**	1.24***
	・コンドームなし	—	—	1.21**	—	1.34***	1.26**

注：有意な影響関係が見られた数値のみ示した。現状認識と性意識の数値は $\beta$ 、性行動の数値はOR（オッズ比）。\*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ 。

#### 目的4（性意識・行動に影響を及ぼすネット利用の特徴を検討する）の結果

■ネット利用は、パソコンよりも携帯電話から行う場合に、影響が見られる場合が多かった。

ネットを利用する際に、携帯電話とパソコンのどちらから行うかによって、影響の強さが変わるかを検討するために、ネット利用を主に携帯電話から行う「携帯電話利用群」と、主にパソコンから行う「パソコン利用群」に分け、分析を行った。

男子の結果では、「性の現状認識」へのネットの影響は、「パソコン利用群」では有意に至らず、「携帯電話利用群」でのみ有意となった（ $\beta=.22^{**}$ ）。女子でも同様に、「性の現状認識」（ $\beta=.12^{*}$ ）、「性的マイノリティに対する偏見」（ $\beta=.09^{*}$ ）、「デート」経験（OR=1.10\*）、3回目の「コンドームなしのセックス」経験（OR=1.19\*）へのネット利用の影響は、「携帯電話利用群」でのみ見られた。

男女ともに、両群での影響に違いが見られない場合もみられるものの、全体としてネット利用は携帯電話から行う場合により大きな影響を与えることが示唆された。

■主にコミュニティ・サイトと、公式サイト・ブログの利用が影響源となっていた。

どのようなジャンルのネット利用をする場合に影響が見られるかを検討するために、「コミュニティ・サイト」、「動画サイト」、「自作小説・自作マンガ」のサイト、芸能人などの「公式サイトやブログ」、の4ジャンル別のネット利用の影響を分析した。

男子の結果では、「性の現状認識」については、コミュニティ・サイト（ $\beta=.14^{*}$ ）と動画サイト（ $\beta=.12^{*}$ ）の影響が見られ、「性的マイノリティに対する偏見」についてはコミ

コミュニティ・サイトの影響のみ見られた ( $\beta=.14^*$ )。女子では、「性の現状認識」についてはコミュニティ・サイト ( $\beta=.09^* \sim .11^{**}$ ) と公式サイトやブログ ( $\beta=.08^* \sim .09^*$ )、「性的マイノリティに対する偏見」についてはコミュニティ・サイト ( $\beta=.09^*$ ) と動画サイト ( $\beta=.09^*$ )、「デート」と「ペッティング」経験についてはコミュニティ・サイト ( $OR=1.20^* \sim 1.21^*$ ) と公式サイトやブログ ( $OR=1.26^*$ ) が有意となった。

男女とも、コミュニティ・サイト、公式サイトやブログの影響が見られることが多く、性意識・行動への影響源となっていることが示唆された。

#### 目的5 (ネット利用の影響の強さが、学校での教育的取り組みにより異なるかを検討する)の結果

■女子では、ネット利用の影響は、学校での性教育実践により弱まる場合が多かった。男子では、教育効果は明確にならなかった。

学校での性教育実践によってネット利用の影響が低減されるかを検討するために、影響関係を検討する時点間 (1→2 回目であれば、1~2 回目調査の半年間) に、学校で性教育に関する授業や講演を受けた「性教育あり群」と受けなかった「性教育なし群」に分け、分析を行った。

男子の結果では、両群に影響力の違いは検出されず、性教育の効果は明確にならなかった。女子の結果では、「性の現状認識」と「性的マイノリティに対する偏見」へのネット利用の影響は「性教育あり群」では有意に至らず、「性教育なし群」でのみ見られた ( $\beta=.13^{**} \sim .23^{**}$ )。同様に、「ペッティング」と「コンドームなしのセックス」経験へのネット利用の影響は「性教育なし群」でのみ有意となった ( $OR=1.11^* \sim 1.20^*$ )。このように、女子においては、ネット利用の影響は「性教育なし群」で見られる場合が多く、有効な介入となっていることが示唆された。

しかし、女子の「デート」経験に関しては、逆に「性教育あり群」でのみネット利用の影響が見られた ( $OR=1.22^*$ )。この理由としては、学校での性教育実践では、「ペッティング」や「セックス」など性行動のより進んだ段階への抑制的指導はしても、「デート」など発達段階から見て高校生が興味を持ち、経験する機会が増えるであろう性行動については、そもそも抑制すべきものとして指導されていない可能性が考えられる。そのため、性教育実践により確かな性知識や性愛に対する望ましい態度を身につけることにより、高校生の性行動として許容されると考えられる「デート」経験へのネット利用の影響が顕在化したのかもしれない。この可能性に関しては本研究のデータからは明確にはならないが、今後、学校での性教育実践の現状を把握し、効果を詳細に検討することが望まれる。

■ネット利用の影響は、学校でのメディアの安全な利用に関する教育実践により弱まる場合が多かった。ただし、女子の性行動への影響に対しては、逆の効果が見られた。

学校でのメディアの安全な利用に関する教育実践によってネット利用の影響が低減されるかを検討するために、影響関係を検討する時点間に、学校でメディア教育に関する授業や講演を受けた「メディア教育あり群」と受けなかった「メディア教育なし群」に分け、分析を行った。

男子の結果では、「性の現状認識」へのネット利用の影響は「メディア教育あり群」では有意に至らず、「メディア教育なし群」でのみ見られた ( $\beta=.17^* \sim .20^{**}$ )。女子でも同様に、「性の現状認識」と「性的マイノリティに対する偏見」へのネット利用の影響は「性教育なし群」でのみ見られ ( $\beta=.10^* \sim .13^{**}$ )、「ペッティング」経験への影響も「性教育なし群」でのみ有意となった (OR=1.12\*)。このように、男女とも、ネット利用の影響は「メディア教育なし群」で見られる場合が多く、有効な介入となっていることが示唆された。

しかし、女子の「デート」と「コンドームなしのセックス」経験については、逆に「メディア教育あり群」でネットの影響が見られた (OR=1.16\*~1.28\*)。「デート」経験への逆方向の効果に関しては、前項の性教育実践でも示されており、学校での教育実践において抑制的指導の対象でないという可能性が考えられる。しかし、「コンドームなしのセックス」経験に対する逆効果についてはもっともらしい理由は見当たらず、今後の検討課題と言えよう。

#### 目的6 (ネット利用の影響の強さが、家庭の特徴や取り組みにより異なるかを検討する)の結果

■男子では、ネット利用の影響は、携帯電話でのフィルタリング・ソフトの設定により弱まる場合が多かった。

携帯電話でのフィルタリング・ソフトの設定により、ネット利用の影響が低減されるかを検討するために、影響を与える時点 (1→2 回目であれば、1 回目調査) にフィルタリング・ソフトを設定していた「設定あり群」と、設定していなかった「設定なし群」に分け、分析を行った。

男子の結果では、ネット利用が「同年代女子のセックス経験率の推定」に及ぼす影響は「設定あり群」では有意に至らず、「設定なし群」でのみ見られた ( $\beta=.29^{**}$ )。「同年代男子のセックス経験率の推定」へのネット利用の影響は、「設定なし群」では  $\beta=.35^{***}$  であるのに対し「設定あり群」では  $\beta=.30^*$  と影響力が低減されていた。このように、男子においては、携帯電話でのフィルタリング・ソフトの設定は家庭でできる有効な介入となっていることが示唆された。



■女子では、携帯電話でのフィルタリング・ソフトの設定によりネット利用が性行動に及ぼす影響を弱める場合があったが、同年代の「性の現状認識」と「性意識」に対する影響では逆効果となっていた。

女子の結果では、「デート」と、2回目の「コンドームなしのセックス」経験へのネット利用の影響は「設定あり群」では有意に至らず、「設定なし群」でのみ見られた ( $OR=1.22^* \sim 1.69^{**}$ )。このように、女子では、携帯電話でのフィルタリング・ソフトの設定は、ネット利用が性経験へ及ぼす促進的な影響を低減させる効果が期待され、家庭でできる有効な介入となっていることが示唆された。

しかし、女子の「性の現状認識」と「性的マイノリティに対する偏見」へのネット利用の影響は、「設定あり群」でのみ見られており ( $\beta=.18^* \sim .25^{**}$ )、携帯電話でのフィルタリング・ソフトの設定が逆効果となっていた。この理由として、性行動の促進と、性行動以前の現状認識や性意識レベルへの影響源が異なる可能性が考えられる。性行動促進の影響源となりうるコンテンツはフィルタリングによってブロックされるが、現状認識や性意識レベルへの影響源は、フィルタリングをすり抜けるコンテンツであるという可能性である。フィルタリングを設定することで性行動への影響は低減されるが、設定することで安心して利用した結果、フィルタリングをすり抜けたコンテンツ利用が現状認識や性意識へ及ぼす影響が顕在化したのかもしれない。本研究のデータからは明確にはならないが、今後、ネット利用のジャンルだけでなく、特に性的内容のコンテンツに関して、より細かな分析をする必要があるだろう。

■男子では、ネット利用の影響は、保護者との会話量が多い場合に低減された。

保護者との会話により、ネット利用の影響が低減されるかを検討するために、影響を与える時点 (1→2回目であれば、1回目調査) での保護者との会話量が多かった「会話高群」と、少なかった「会話低群」に分け分析を行った。

男子の結果では、ネット利用の影響は「会話高群」では有意に至らず、「会話低群」でのみ見られ ( $\beta=.15^* \sim .24^{***}$ )、一貫した教育効果を示していた。保護者とのコミュニケーションは、家庭でできる有効な介入となっていることが示唆された。

■女子では、ネット利用の影響は、保護者との会話量の多寡により、抑制される場合も促進される場合もあった。

女子の結果では、ネット利用が「性の現状認識」と「デート」経験に及ぼす影響は「会話低群」でのみ見られ ( $\beta=.12^* \sim .16^{***}$ ;  $OR=1.14^*$ )、「会話高群」では見られなかった。しかし、「性的マイノリティに対する偏見」と「コンドームなしのセックス」経験へのネット利用の影響は、「会話高群」でのみ見られており ( $\beta=.15^*$ ;  $OR=1.44^{**} \sim 1.35^{***}$ )、保護者とのコミュニケーションが有効な場合も逆効果となる場合もあることが示唆された。保護者とのどのような内容の会話がネット利用の影響低減に対して有効となるか逆効果となるかの切り分けに関しては、本研究のデータからは明確にはならないが、今後検討してい

く必要があるだろう。具体的には、本研究では、保護者との会話量は、学校での勉強や人間関係、進路、メディア利用や金銭など全般的な内容についての会話量を測定したが、特に性的な内容に関する保護者とのコミュニケーション内容について現状を把握し、影響低減の効果を検討することが望まれる。

目的7（ネット利用の影響の強さが、科学的に正しい性知識とメディア・リテラシの個人差により異なるかを検討する）の結果

■ネット利用の影響は、科学的に正しい性知識が高い場合に見られる場合が多かった。

科学的に正しい性知識量の高低によって、ネット利用の影響が強まる／弱まるのかを検討するために、影響を与える時点<sup>4</sup>（1→2回目であれば、1回目調査）において、性知識得点が高かった「性知識高群」と、得点が低かった「性知識低群」に分け、分析を行った。

分析の結果、ネット利用が男子の「性の現状認識」に及ぼす影響と（ $\beta=.20^* \sim .28^{**}$ ）、女子の性行動に及ぼす影響ともに（OR=1.15<sup>\*\*</sup>~1.22<sup>\*\*</sup>）、「性知識低群」では見られず「性知識高群」でのみ見られた。性知識のみを提供することが、ネット利用の影響低減にはならないことが示唆された。

■女子では、ネット利用の影響は、性知識が高い場合に、「性の現状認識」と「性的マイノリティに対する偏見」に対して、低減される場合があった。

女子の結果では、ネット利用が「性の現状認識」と「性的マイノリティに対する偏見」に及ぼす影響は、「知識高群」では見られず、「知識低群」でのみ見られた（ $\beta=.14^* \sim .18^{**}$ ）。女子においては、認識や意識・態度のレベルでは、科学的に正しい性知識がネット利用の影響を抑える可能性があることが示唆された。

■ネット利用の影響は、性的メディア・リテラシが高い場合に、「性の現状認識」と「性的マイノリティに対する偏見」に対して、低減される場合があった。

ネット上の性に関する言説に対する批判的思考力である性的なメディア・リテラシの高低によって、ネット利用の影響が強まる／弱まるのかを検討するために、影響を与える時点（1→2回目であれば、1回目調査）において、リテラシ得点が高かった「リテラシ高群」と、得点が低かった「リテラシ低群」に分け、分析を行った。

分析の結果、男女ともにおいて、ネット利用が「性の現状認識」と「性的マイノリティ

<sup>4</sup> 2回目調査では性知識を測定しなかったため、2→3回目の半年後の影響についての分析では、1回目調査での性知識得点により高低に分けた。

に対する偏見」に及ぼす影響は、「リテラシ高群」では見られず、「リテラシ低群」でのみ見られる場合が多かった( $\beta=.13^* \sim .24^{**}$ )。男子では一部に有意に至らない場合もあったが、総じて、リテラシの育成が、認識や意識・態度レベルへのネット利用の影響を低減させる可能性が示唆された。

**■女子では、ネット利用の影響が、性的メディア・リテラシが高い場合に、性行動の経験に対して、見られる場合があった。**

女子の結果では、3回目の「コンドームなしのセックス」経験に対するネット利用の影響が、「リテラシ高群」でのみ見られており (OR=1.34\*\*\*)、性的メディア・リテラシの育成が逆効果となりうることが示唆された。このような「コンドームなしのセックス」経験に対するメディア・リテラシの逆効果については、先述の「学校でのメディアの安全な利用に関する教育実践」においても共通して示されている。メディア教育やリテラシの逆効果がどのようなメカニズムによって生起しているのか、今後検討していく必要がある。

#### 4. 研究のまとめ

##### 1. ネット利用は、高校生の性意識・行動に影響を及ぼす場合がある。

まず、女子においては、ネット利用が多いほど、デートとペッティング、コンドームなしのセックス経験が増えるという影響が確認された。デートとペッティングへの影響を「悪影響」と断じることはできないが、コンドームなしのセックス経験への影響については、性感染症や望まない妊娠の予防の観点からみて、対策が必要と言えるだろう。

性行動まで至らない現状認識レベルへの影響については、男女両方において、ネット利用が多いほど、同年代のセックス経験を高く推定するようになるという影響が確認された。同年代が高い割合でセックスを経験しているという認識は、若年でのセックスを容認し、皆から遅れたくないという焦りから、結果的に親密な性行動に結びつく可能性も考えられる。本研究の結果では、このような若年での性経験の肯定や憧れに関連する性意識（「性的寛容さ」「通過儀礼としての性」および「責任意識」）が、ネット利用により増強されるという直接の影響関係は検出されなかった。しかし、現状認識を媒介したネット利用の影響、すなわちネット利用が現状認識に影響し、現状認識が性意識に影響するという間接的な影響関係について今後検討していく必要がある。一方で、ネット利用が「性的マイノリティに対する偏見」を増強するという影響がみられたことには注意が必要である。

##### 2. ネット利用の影響は、友人・先輩との性的情報交換の影響力に比べ、総じて弱い。

友人・先輩との性的情報交換は、男女ともにおいて、性意識・行動の様々な面に影響を及ぼしていた。特に、性の現状認識と性行動については一貫した促進効果が見られ、ネット利用の影響に比べて、友人・先輩との性的情報交換が非常に大きな影響源となっていると言えるだろう。前項の通り、ネット利用の影響について注意を要するべきことがあるのは事実であるが、青少年を取り巻く様々な性的情報源の中で、ネット利用の影響力が必ずしも大きいわけではないようである。

##### 3. 科学的に正しい性知識を提供するだけでは、ネット利用の影響を防ぐことはできない。行って良いこと／悪いことについての価値判断や、性情報を疑ってみる批判的思考力にまで踏み込んだ教育的介入が必要であろう。

一般的には、科学的に正しい性知識を身につけることで身近にあふれる不正確な性情報の影響を低減できるという考えがあるが、本研究での結果はこれを支持するものではなく、性知識が高い場合の方がネット利用の影響が検出されることがしばしばあった。しかし、この結果から、「寝た子を起こすな」という結論に至るのは早計であろう。本研究の結果では、学校で実施される「性教育」は特に女子の現状認識と性意識・行動に対するネット利用の影響を低減していた。また、学校での「メディア教育」と、個人のメディア・リテラシーは、女子の性行動に対しては疑問があるものの、男女ともに現状認識と性意識に対するネット利用の影響を緩和させる効果を示していた。これらの有効となりうる教育的介入や能力育成と性知識の提供の大きな違いは、「単なる知識」の提供にとどまるか、自己の性経

験において何を行ってよいのか／悪いのかといった価値判断や、身近な性情報を疑ってみる批判的思考力の育成まで含むか否かという点であろう。ネット利用が性意識・行動に及ぼす影響低減のためには、ここまで踏み込んだ教育的指導が必要と考えられる。

4. ネット利用の影響は、パソコンからの利用ではなく携帯電話での利用で生じる。ネットの影響は携帯電話でのフィルタリング設定により防げる場合が多いが、女子の「現状認識」と「性意識」に対する影響については教育的介入が必要であろう。

ネット利用の影響が顕在化するのには、その利用端末がパソコンではなく携帯電話である場合が多く、携帯電話からのネット利用がより注意を要すると言える。携帯電話でのフィルタリング設定は、おおむね有効性が確認されたが、女子の「性の現状認識」と「性的マイノリティに対する偏見」に対するネット利用の影響については逆効果となっていた。フィルタリング設定のみでネット利用の影響を防ごうとするよりは、フィルタリングを設定した上で、適切な教育的指導を実施することが望ましいだろう。